



高知県で取材合宿を行った松田ゼミ

学生目線で切り込む 高知のリアル

FLPジャーナリズムプログラム松田ゼミは、9月5日から8日まで高知市をベースに取材合宿を行いました。学生それぞれが見つめてきた高知の魅力は…？第1弾をお届けします。

INDEX

- 高齢者アイドルグループ …… 8P
- 元気集落プロジェクト …… 10P
- 全国1位の女性管理職 …… 12P



『日本を、ポ爺タイプに』
おじいちゃんアイドルが
私たちに教えてくれること

高木伸代 (法学部4年)

松田ゼミ爺POP班



CD『高齡バンザイ』のジャケット写真(提供=ユニバーサルミュージック)

歌って踊るおじいちゃん!? 高知県のご当地アイドル “爺POP”

平均年齢67.2歳のおじいちゃん5人組アイドルグループが話題になっている。彼らの名は“爺POP”。

『日本を、ポ爺タイプに。』をキャッチフレーズに高知県のご当地アイドルとして結成され、ことし3月、『高齢バンザイ』でメジャーデビューを果たした。

CDを発売し、動画を公開した。動画投稿サイト「you tube」の再生回数は約50万回に達するなど大きな反響を呼んでいる。

ご当地アイドルといえば10代や20代の若者というイメージがある。しかし、高知県はあえて高齢者をアイドルとして起用した。それは、高知県が抱える深刻な高齢化問題と、前向きで明るい県民性を掛け合わせることで高知県の魅力をPRするためだ。

高齢化は全国的にも問題視されており、国も様々な政策を打ち出しているが、高知県の高齢化は全国に約10年も先行していると言われている。

高齢化率は30.1%で、全国では秋田県に次ぐ2位。3人に1人が65歳以上ということになる。

しかし、爺POPはこんな現状も、『3人に1人65歳以上だけど陽気陽気 エブリバディ陽気』『高齢バンザイ! 高知はご長寿の国 不老不死も夢じゃない』とポップに歌い上げる。

そんな前向きな歌詞や、おじいちゃん

たちのぎこちない歌とダンスが、多くの人の心をつかんでいるのだ。

自然と生まれる人との つながり

「(高齢化の現状を) 前向きに捉えている」と語るのは爺POPのメンバーの1人である大高明さん(65)。

中土佐町上ノ加江漁業組合・専務理事を務め、漁業体験館『わかしや』を営んでいる。

高齢化の問題をポジティブに捉えられるのは、生活している環境にあるという。大高さんの周りには、年上の人々がほとんどだが「そういう人たちも一生懸命動いて、働いている」。どんなに歳をとっても積極的に動いて仕事をしている人が周りに多いから、「そんな姿を見て自分も」とよい刺激を受けることができるのだ。

「みんなスターになりたいわけよ。明るく生きたいんよ」

高知県が抱える深刻な高齢化問題すらも前向きに捉えられるのには、目立ちたがり屋な県民性にも大きな理由がある。

高知県民が目立つために集まるのが“酒場”。お酒を飲みながら自分の自慢話をする場所なのだとか。時にはそれが原因で喧嘩にもなるけれど、自然と「人とのつながり」が生まれている。

出会った人みんなが「家族」 温かい県民性から生まれる 前向きな気持ち



爺POPメンバーの大高明氏

『高知は高知家という家族 あったかさ 超えて 暑苦しい』

『高齢バンザイ』の中にはこんな歌詞もある。高知の人は暑苦しいほど温かく、近所の人、出会った人みんなを大切にします。

大高さん自身も漁業体験館で民泊を行っているが、泊まってくれた人と今でも連絡を取ることもあるという。どんな人でも温かく迎える、おせっかいなくらい世話焼きな人が多い高知県ではみんなが「高知家」という「家族」なのだ。

こういった「人とのつながり」が強く、大切にすることこそ、全国に約10年も先行する超高齢化社会に直面しても前向きに「ポ爺タイプ」に捉えることができるのだろう。

今、日本ではこういったつながりの希薄化が社会的に問題となっている。高知県のようにいくら元気に働いている高齢者がいても、影響を受けたり、刺激を受けたりすることは少ない。歳をとっても酒場に集まって自慢話をする高齢者はほとんどいないだろう。近所づきあいや周りとの付き合いが減り、地元を歩いても声をかけられることは珍しくなってしまった。

このほかにも、たくさん抱えている問題を抱え、日々暗い話題であふれている日

本。そして、多くの人々は自分中心の考え方で、それらの問題に向き合いがちだ。そんな日本に大切なことは、高知家のように日本全国誰もが“家族”という意識なのかもしれない。どんな問題も他人事ではなく自分

の家族という意識で向き合うことができれば、一人ひとりが主体的に考え、多くの解決策が生まれてくるかもしれない。近所の人々のことも近くに住んでいる家族だと思えば、自然と交流も

生まれ、笑顔やポジティブな気持ちが生まれてくるのではないだろうか。爺POPは歌を通して「日本を、ポ爺タイプに」してくれるだけでなく、今の日本にとって大切なことも同時に教えてくれている。

常に高齢者に寄り添い、町民全員で支えていく

水落遥子 (法学部3年)

松田ゼミ爺POP班



高知県大豊町は、県内最大85集落ある大きな町だ。しかし限界集落という言葉の発祥の地であり、全国でも高齢化の進行が早い町でもある。

そんな大豊町の役場で働く森一芳さん。役場では「地域担当班」から「元気集落プロジェクト」と名前を変えた高齢者と関わる部署で12年もの間勤めてきた。

仕事は高齢者の見守りと訪問。1人暮らしの高齢者や高齢者のみの世帯の家に伺って話をする。森さんがこのプロジェクトにける思いとは。

「人とのつながりやね。高齢者と話をする中で例えばここのおばあちゃんとあそこのおばあちゃんは仲が良いとか、あそこのおばあちゃんがないときは、ここのおじいちゃんに聞けば分るとか、そういうことも高齢者と関わって初めて分かるんですよ」

森さんがつながりを大事にする理由は、それだけではない。

「役場なんで部署が頻繁に変わ

る。でも高齢者との関係を深いものにするにはやっぱり経験が必要。1人が何回も話し、関わらんと信頼は作れん」

高齢者に寄り添うには、高齢者との信頼関係を築くことが大事であり、時間があるときはできるだけ多くの高齢者の家へ訪問するのだと力強く話す。

見守り、訪問は多くの町民との連携により成り立っている。

「保健師も時間があるとき、気になる高齢者を訪問しよるし、ヘルパーさんも多くの高齢者の情報を持っているから保健師とヘルパーさんの連携は大事にしています。今まで役場と連携して高齢者を見守るっていうのがなかったと思うんですよ。それは、元気集落プロジェクトが出来てからの成果ですね」

元気集落プロジェクトでは、ヤマト運輸と「見守り協定」を結んでおり、宅配時、高齢者に異常があった際にドライバーがすぐ役場に連絡を

してくれるというサービスがある。

今までで20件の連絡があったという実績もあると話してくれた。

細かな気遣いが大きな信頼に

高齢者の見守り、訪問で最も大事にしていること、それは「コミュニケーション」であるという。

森さんがコミュニケーションの際に意識していることとはいったい何か？

「高齢者の目線に合わせることやね。目線は上でも下でもいけない。話し言葉も役場の人間ではなく、同じ集落の人間として話すようにしています。そうすることで高齢者も我々と話しやすくなり、より良い関係が築けます」

最初のあいさつで高齢者の耳の状態を確認して、臨機応変に対応すること。常日頃から笑顔でいること。ただの「こんにちは」では



元気プロジェクトの班長、森一芳氏

なく、首を大きく傾げて分かりやすくすることなど意識している点がたくさんあるという森さん。今では、その努力が評価されて高知大学で高齢者への対応の講義も行ったという。

大豊町の強みは、高知市まで車で20分という交通の便の良さや他県へのアクセスの良さ。しかし、強みは大豊町の弱みでもあるのだという。

「人が出ていきやすい。親を町に残してもすぐに帰ってこられる。そのため大豊町は、他町と比べても人口減少率が激しい。また、役場の職員の3分の1が高知市から通っている。大豊町民ではないのです。高齢者の町民感情からしたらそういうのは許さない。

訪問でもその話はよくします」

そんな中で信頼関係を築くのは難しい。しかし森さんは、話し方や身ぶり手ぶりから高齢者との距離を縮め、何度も訪問を重ねることで少しずつ信頼関係を構築していったのだ。

その結果、夫婦喧嘩の仲裁や電球を替えるなど距離が縮まったことで身近な手伝いが増えたそうだ。

最期が最高になるために

「高齢者にとって住みやすい町にすること、そして人生の終焉を迎えるときに、ここに住んでよかったと思ってもらうことが私の目標です」
幼い頃、父の戦争体験を聞いてから

「死」というものを身近な存在であると考えていたという森さん。

「いつ死んでも構わんって思っています。自分の終焉でいつ来ても明日来てもおかしくないよ。皆が最期を病院じゃなくて自宅で迎えて亡くなって、亡くなるときにここで死んで幸せじゃったと思ってほしいなあっていうのが僕の思いで、それが我々元気集落プロジェクトの仕事だと思っています」

森さんにとって元気集落プロジェクトでのやりがいは、高齢者から言われる「ありがとう」だと照れくさそうに語った。

今後全国的に進行していくと予想される高齢化。この社会問題に関係のない国民は一人としておらず、決して目を背けてはならない。しかし、だからといってネガティブに考えるのではなく、大豊町のように町全体が高齢者一人ひとりに寄り添い、関わり、見守ることで住民皆が住みやすい環境になり、住人一人ひとりが生き生きとした活気のある町になることであろう。

「高齢化」は、社会問題という短所ではなく、「長生き」という長所なのだから。



松田ゼミ

「ジャーナリズムの理解と取材・表現活動の実践」をテーマとするFLP松田ゼミでは、毎年夏季に取材合宿を行っています。

取材ベース（去年は広島、一昨年は石巻）の決定、具体

的な取材テーマによるグループ編成、取材先へのアポ取り、そして、実際の取材活動とすべてゼミ生が自主的に進めます。本年のゼミ生は2年生8人、3年生7人、4年生10人と大所帯。

先輩から後輩への「指導」もありつつ、学年関係なしのフラットな議論を通じて主体的に活動しています。

はちきんの発想力が 会社を支える

甲斐稔理 (法学部4年)

松田ゼミ婚活班



はちきんとは「男勝りの女性」を指す土佐弁であり、気のいい性格で前進し続ける高知県女性の県民性を表した言葉である。

高知県は女性の管理職比率が全国1位であるなど、女性が非常に活躍している県だ。「ちゃきちゃき（しっかり）していて、てきぱきと仕事をこなす女性が多いことが高知県で女性が活躍している一つの理由でしょうね」と、菊水酒造株式会社の総務部長、春田和城さん（44）は話す。

伝統ある会社に 革命を起こす

今回お話を伺った菊水酒造は、江戸時代創業の歴史を持ち、高知県を代表する老舗の酒造メーカーの一つである。

酒蔵と聞けば、伝統を重んじ閉鎖的だというイメージを浮かべる人も多いのではないだろうか。しかし、同社の魅力は先人たちの築いた良き伝統を脈々と受け継ぎつつも、新しい分野も含めた幅広い商品を世に送り続ける先駆的な商品開発を得意とするところにある。

中でも「女性向けのお酒」は発足当時こそ革新的なジャンルであった

が、着実に成長し約10年が経過した現在では同社を支える主力分野になっている。

常に挑戦を続ける新しい取り組みを支え、プロジェクトの成功を収めた裏には、「はちきん」という言葉がよく似合う女性たちの努力があった。

はちきんたちの努力

「自分たちで納得のいくお酒作りがしたい」。女性による女性のためのお酒づくりプロジェクトのプロ

ジェクトリーダーを務める松岡良美さん（34）は、上司だった春田さんに直接申し出たと言う。

もともと同社は日本酒の蔵だったがラム酒や蜂蜜酒を製造するなど、商品開発に長けていた。それまで女性が商品開発に関わることはなかったが、たびたび商品開発部の男性たちが女性に意見を求めてきた。

「女性目線で見ると、ちょっと違うんじゃないかなという点がたくさんあった」。これがきっかけで、2009年にプロジェクトがスタートした。



菊水酒造の春田和城氏（左）と松岡良美さん

時代の変化と共に

2009年と言えば、大手飲料メーカーが世界初のアルコール0.00%のノン・アルコールビールの発売を開始した年でもある。

「お酒に酔う」時代から「お酒を楽しむ」時代に変化し始めたのかもしれない。そんな年に、同社も新たな一歩を踏み出し始めたのだった。

女子会ブームに目を付け、女性が好む甘い味や女性が喜ぶ見た目の可愛らしさ、そして自分へのご褒美として少し高級な物を買いたい、という女性の隠れたニーズを満たそうと考えた。

プロジェクト成功の裏にあった苦悩

「それまで日本酒や焼酎を主に造っていたので、新しいお酒の商品開発は、簡単にはいきませんでした」

当時を振り返って松岡さんはそう語る。プロジェクトで開発されたお酒は、これまでの酒造業界の常識を超えるユニークなお酒だった。

例えば、肌に良いと言われるコラーゲン入りのリキュール「ゆず美

人」、「梅美人」、「桃美人」やヒアルロン酸配合の「ゼリーのお酒」、ダイエットにも効果的と言われているスーパーフード・ココナッツミルクを使用した「ココナッツミルクのお酒」など。

女性ならではの感性を生かした商品を生み出し、今や200アイテムを超えるという。

伝統ある酒造業界にこれだけ多くの革新を生み出した裏には、同じくらい多くの困難もあった。

それまで造っていたお酒とは使用材料、醸造方法、保存方法がまるで違う。異物が混入していないか調べる検品に至っては、透き通った日本酒とは異なり、ヨーグルトのお酒は初めから濁ってみえるのだから、その苦労は計り知れない。

女性ばかり目立つことが、会社に不満を生む

女性向けのプロジェクトが軌道に乗り始めると、注目されるのはいつも女性ばかりの企画営業部門だった。商品企画は企画営業であるが、製造部署、販売部署など、一つの商品が消費者の手に届くまでには様々な部署が関わっている。

また、女性社員が先頭を切って商品開発を行うことに対して、社内の男性社員が嫌悪感を示すこともあったと言う。

そんなときは双方が納得いくまで話し合いを重ね、不満やわだかまりが残らないよう解決してきた。

革命の成功は女性の扱い方!?

「良い意味で、女性だからという考えが通用しません」。松岡さんは力強く語った。

プロジェクトが始まったことにより、今や全社員60人のうち半数は女性が占めている。各部署の責任者にも女性が多く登用され、男性社員と肩を並べて働いている。

本当の意味で男女平等を体現することは難しいが、常にコミュニケーションを取り合い、特別扱いしないことが、女性が活躍できる場を作った要因ではないだろうか。

「女性向けのお酒」という隠れたニーズを引き出すことに成功した同社は、今も新たな商品開発を続けている。これまでの経験と柔軟な発想力を武器に、革新はこれからも続いていく。



女性ならではの感性を生かした商品の数々(写真提供=菊水酒造株式会社)